編集後記

ここに第2号をお届けします。「新編 富士見のあゆみ」の編さんなどにより前号とは間が空いてしまいました。

特集の趣旨を反映して、過去に蓄積された資料の紹介や再評価を行った論考が集り、分野・時代とも多様性がある号となりました。

配列は、富士見市の文化財保護に携わった順番とし、肩書きは本年3月当時を示しました。

冒頭2本は、合同企画展「ひらいた 考古館」の関連講演会の内容をまとめさせていただきました。荒井氏が文化財保護、会田氏が文化財活用、それぞれの基礎を、寝食を惜しんで築かれたことが伝わります。若き日の両氏が写る広報表紙があったので、巻頭図版としました。荒井氏は晴耕雨読の研究生活を送り、会田氏は友の会会員としての活動を続けています。

和田(雅)氏の報告もそれに連なります。市民も職員も若かった、昭和という時代が浮かび上がります。著者は4月から、市民として協力する側になりました。

和田(晋)は、富士見市に入職した年から 35 年間、羽沢遺跡獣面突起付土器を検討し続けてきました。4 月から、郷里であり勝坂式土器の本場でもある信州に、活動の場を移しました。

早坂は、まとめる機会が無かった、縄文前期前葉の土器について整理しました。印刷費が掛らないことにつけ込んで長くなりました。4 月から水子貝塚に戻りました。

駒木は、公民館での勤務を契機に、今の状況における専門職のありかたを検討しました。事例は公民館ですが､資料館にも通じる課題です。4月から難波田城資料館に戻りました。

以上は、「考古館」時代の体験者です。

以下は、「資料館」移行後の入職です。

山野は、石造物銘文の背景を、市内古文書に限らず、江戸切り絵図などを駆使して解き明かしました。江戸・東京と近郊のつながりは、物資流通にとどまらず人の移動も重要でした。

田ノ上は、近現代ならではの資料である統計書を活用して「入間ごぼう」の実相に迫りました。農業は経済的行為ですから、歴史的検討には数字の裏付けが重要です。

佐藤は、報告から漏れた近世陶磁器の紹介です。近世・近代考古学の成果は、両資料館の役割分担の狭間となって、常設展示に反映されていません。今後の見直しも必要でしょう。

髙橋は、考古館開館以前の調査資料に含まれていた縄文土器を紹介しました。南通遺跡は弥生時代大規模集落跡ゆえに、縄文土器の多くが未報告（宝の山）となっています。

大野は、考古館開館直後に発掘調査された、未報告地点をまとめました。行政上の「埋蔵文化財包蔵地」の境界と、各時代の「集落跡」の境界は必ずしも一致していません。

齊藤は、46 年前の報告書に掲載された資料を再評価し、東北地方との関係が浮かび上がりました。どの分野でも、研究の進展とともに資料の見直しが求められます。

菅沼は、未報告だった近世墓と副葬銭の紹介です。出土状態の検証を踏まえた近世考古学による貨幣分類を採用しました。戦争の痕跡である爆弾跡の認識も重要です。

いうまでもないことですが、第3号の刊行も予定しています。当館職員以外でも、当館の所蔵資料を用いた研究や、富士見市域に関する地域研究を投稿していただくことができます。資料館へご相談ください。

富士見市立資料館調査研究報告 第2号

令和6年（2024）12月28日発行

編集･発行　富士見市立資料館

本館　富士見市立水子貝塚資料館
〒354-0011 埼玉県富士見市大字水子2003番地1
TEL 049-251-9686　FAX 049-255-5596

分館　富士見市立難波田城資料館
〒354-0004 埼玉県富士見市大字下南畑568番地1
TEL 049-253-4664　FAX 049-253-4665